参加型防災計画における議論プロセスに関する実験的研究

名古屋工業大学大学院　学生員　日岡　崇
名古屋工業大学大学院　正会員　秀島栄三

１．はじめに

災害に対する地区のプリペアドネスを高めるには、物的基盤整備だけでは限界がある。住民の災害に対する意識を高め、また即応できるようにするためのしくみ、取り決めなどもつくっていく必要がある。その際に個々人あるいは世帯を超え、地区として解決しなければならない問題に直面する場合がある。しかし、人々が議論しあい、問題を解決することは容易なことではない。災害という一般的に未知の状況を想定して問題解決に取り組むこととなり、かつ議論に参加している人々が必ずしもその問題に強い関心を持つとは限らない。とはいえ議論の展開によっては地区で策定されるべき計画内容の質に関わることとなる。専門家が計画をつくりあげるのではない参画型計画の場では、関係主体がどのように計画策定に関わるかというプロセスのデザインについて検討の余地があるといえる。

そこで本研究では地区の防災計画の策定について、複数の人々が議論を通じて何らかの結論を導いていく場を想定した実験を行い、会話のやりとりを観察することから、人々が合意を形成していくプロセス、ならびに議論を適切な方向へと導くための方法について基礎的な考察を行う。

２．議論プロセス実験

７人の参加者に集まって貰い、次のような実験を行った。全員が仮想的なある地区の住民であると仮定してもらい、その上で**図1**に示すような地区防災計画に関するテーマを提示する。まずテーマについて各自の初見を表明し、それから自由に話し合いをしてもらう。そして全員で一つの結論を得て議論は終了とする。テーマは一つの費用配分問題となっており、全員で一つの結論を出さなくてはならない。分析者は議論のプロセスをビデオに収録し、途中では質問があれば議論の前提となる情報のみ回答した。ここで７人であることに根拠はないが、各自が意見を発する機会をもてるよう５人程度と考えた。また当事者としての外国人居住者はこの議論の場には出席していないと想定してもらった。

> 危惧されている地震の危険地域に、あなたの住んでいる町が新たに指定されました。そこで防災対策を地区住民で話し合ってください。震災前後において社会的弱者（高齢者、障害者、子供、外国人居住者など）に対してどのような対策をとるべきか、今回は特に外国人を対象として考えてください。
>
> ここで、地震情報を発信するシステム（携帯電話とサーバーから構成される）を地区で共有するとして、それに掛かる経費をどのように分担し合うかを決めてください。経費５００万円を住民・外国人居住者から集めます。住民は日本人居住者１０世帯、外国人居住者５世帯、計１５世帯とします。日本語情報、また地震そのものを理解しがたい外国人居住者は払わないという可能性もあります。以下に示す分担比率を決めて下さい。
>
> 分担比率　　住民・外国人居住者（　　：　　）
> 例（６：４）

図1　提示したテーマ

実際に議論を進めてもらったところ、いろいろな発言が交わされた。まず小さな目標として目標１（日本人も外国人居住者も金額を均等にするかどうか）が自然に浮かび上がり、議論された。そして、目標１の結論に至る前に目標２（受益の程度に差があるかどうか）が議論され、目標２の結論が出た。それから再び目標１に戻り、目標１の結論がテーマの結論となって議論は終了した。

参加者のやりとりの一部を取り出すと**図2**のように示すことができる。局所的に見ると、問いかけに

キーワード：市民参加，防災計画，合意形成
〒466-8555　名古屋市昭和区御器所町　Tel&Fax: 052-735-5586

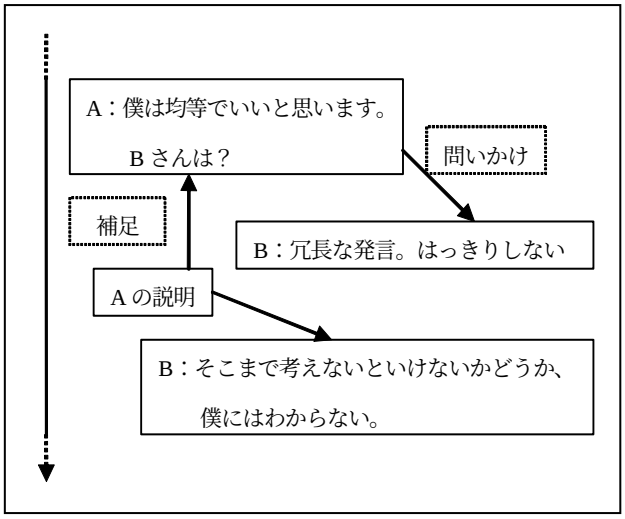

図2　参加者のやりとり

対してあいまいな発言で答える対応や、話しながら問題を理解していく過程などがあった。また自発的に進行役を担う者、他者の意見に同調する発言しかしない者などそれぞれの参加者に本質的な個性あるいは集団の中で形成された個性がみられた。

３．議論プロセスについての考察

実験より、議論を通じて最終的に合意が形成されていくプロセスには次のようなパターンがあると考えられる。一つを回帰式パターン（**図3**）、もう一つを段階式パターンと呼ぶこととする。（**図4**）

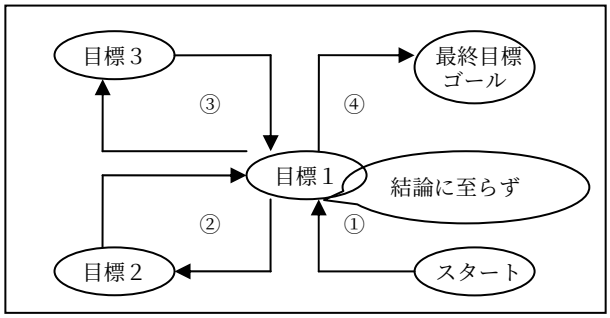

図3　回帰式パターン

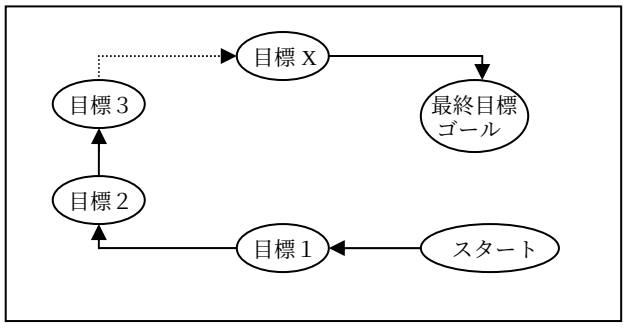

図4　段階式パターン

回帰式パターンは、目標１の結論に至らなくても次の目標（２，３・・・）へと移行する。目標（２，３・・・）の議論の順番は決まっていない。一つの小さな目標の結論が出なくても次に進んでいく。結論が出なくても次に進むことで参加者に気分転換のような効果を与えられる。一方、目標が次から次へと移行していくことで時間がかかり、最悪の場合は最終目標まで至らない。

段階式パターンは、最終目標の前に小さな目標を設定し順次結論を出していくものである。参加者が最終目標を明確に理解していなくても、小さな目標ごとに順次議論していくことで話が頓挫することが防がれる。一方、最初に出た目標で結論が得られなければ次に進めない。

それぞれのパターンにプロセスとして長所と短所があり、また実際の議論がどちらに進むかはテーマ、当事者などに依存することとなる。一方、どちらを用いると議論が円滑に結論に到るかを推測可能な場合もあるだろう。経験や知識を積んだファシリテーターなら予めどちらを選ぶべきかを判断できるかもしれない。今回は確認できていないが、発言する当事者にとってはこのようなパターンを認識することで議論に対しより積極的、また協調的な行動をとることができるようになるものと思われる。

４．終わりに

本研究では、一種の集団実験を行い、議論を通じて合意が形成されるプロセスを観察した。今回は議論が収斂しやすくなるようにテーマを設定した。現実には議論が発散しやすいテーマを検討しなければならない場面もある。その場合には参加者が上述した合意形成のパターンを理解し、戦略的に対応することで議論の収斂に繋がる可能性も考えられる。引き続き様々な設定での実験を行いたい。

参考文献

1)村田,延藤:参加型計画づくりにおける住民と行政の意思及び計画内容の変容過程についての考察-ワークショップによる都市計画道路及び水辺空間整備計画策定（柳井市）を事例として,日本都市計画学会学術研究論文集 35,2000.等

2)谷本,喜多,三ツ国:合意形成の場における雰囲気の形成とその下での住民の発言行動に関するゲーム論的考察,土木計画学研究論文集 18,2001.